

優秀賞

支えてくれた保険

秋田県 能代市立能代南中学校 二学年

若松 空

私が五歳のときのことです。母が重い病気になり、入院することになりました。

父は私が三歳のときに亡くなってしまったので、母の入院中、私は母の実家に預けられました。最初は、母がすぐに帰ってくるのだと思い込み、祖父母と過ごす毎日を楽しんでいました。

五歳の私には、病気の恐ろしさはよくわかっていませんでしたし、何日も入院することになるなど、理解できていなかったと思います。だから、時折思い出しては、祖父母に「ママはいつ帰ってくるの？」と尋ね、「ママはもう少しで帰ってくるよ。」という言葉に安心していたように記憶しています。でも、日増しにさみしくなり、母に会いたくなって、大泣きする日が増えていったのではないかと思います。

特に印象に残っているのは、食事の時間です。いつも隣に座って世話をやいてくれているはずの母がいないことが我慢できなくなっていました。お風呂で髪を洗ってくれる母、毎夜必ず寝かしつけてくれた母は、何日も帰ってきませんでした。穴が開いたような気持ちに埋まることはなくて、「ママも、パパみたいに死んじゃうの？」と祖父母に言っ、あわてさせたこともあったといいます。

手術が終わった母と面会したときは、とても驚きました。喜びいっぱい面会したのに、母の顔色の悪さが気になり、混乱してしまったことを覚えています。そばに近付けずにいる私を、あるとき母はどんなふうに思ったのだろうか、今でも思い出すことがあります。

それでも、母の入院中、祖父母に励まされながら、母の喜ぶことをしようとしていました。自転車の練習をして、一人で乗れるようになったら母が喜んでくれるだろうと、何度も何度も挑戦したことは特に心に残っています。挑戦することが大切なのだと思えるようになったきっかけでもあります。がんばれば母は帰ってくると信じていたとおり、母は退院しました。

困ったのは、治療や入院の期間だけではなく、退院後も休養しなければならなかったことでした。母の手術跡を見るたびに、お手伝いをしなければとか、わがままを言ってはいけなやか、私は自分をおさえることを考えていました。もちろん、母が家にいることがうれしく、私は経済的なことは全く考えてはい

## 第61回中学生作文コンクール

ませんでした。毎日母がいてくれることが、ただただうれしくて仕方ありませんでした。

今思えば、入院中は収入もなく、しかも治療や入院の費用がかかっていたことになりました。そして、私が思っていたよりも長い間、私たちは収入のない生活をしていたようです。そのことを「昔々の苦労話」として母から聞いたのは、ごく最近のことです。

それでもなんとか乗り越えられたのは、母が生命保険に入っていたため、金銭面で助けられたからだと教えてもらいました。手続きを試みたら、思っていた以上に手厚く守られていることがわかり、母は安心したそうです。

それは、言い換えれば、生命保険に加入していた人たちの見えない助けがあったということなのだと考えます。おかげで、母はしつかりと休養し、仕事にもどり、今も元気に過ごしています。母が働いているおかげで、私も楽しく学校生活を送れているのだと感謝しています。

現在、二人に一人はガンになると聞いたことがあります。正直言って、私も両親のように病気になるかもしれないという不安があります。だから、万が一に備えて、働くようになったら生命保険に入りたいと思います。そして、もしも元気に過ごせていたら、私の納めたお金が、誰かの生活を支えたのだと考えるつもりです。生命保険とは、全く見知らぬ人たちによる助け合いなのだと感じています。